

Eifman Ballet エイフマン・バレエ

Eifman Ballet
Saint Petersburg
(芸術監督:ホルス・エイフマン)

「ロダン～魂を捧げた幻想」

台本・振付・演出:ホルス・エイフマン
音楽:ラヴェル、サン＝サーンス、マスネ、ドビュッシー、サティ

生み出された傑作彫刻の裏側にあった激しくも儚い愛…。
バレエで描かれるシーンを、第1幕から少しだけご紹介します。

Story — 第1幕 —

クローデルが暮らす精神病院を訪れるロダン。許しを請うロダンを、身を引くつらさながら拒絶するクローデルの姿に、ロダンは彼女と出会った頃の日々を思い出す…。



若い芸術家たちが賑やかに集うロダンのアトリエ。突如現れた若き彫刻家カミーユ・クローデルの瑞々しさを湛えた美しい身体に、ロダンは自らの理想を見出す。引き寄せられるように心通わせる2人。彼女の身体がインスピレーションの源となり、新たな作品『うづくまる女』が生み出される。

溢れ出すアイデアに導かれ、巨大な粘土の固まりに立ち向かうロダン。大作『カレーの市民』を見事に作り上げ喜びの抱擁を交わすロダンとクローデル。

しかし一方、一人の芸術家としての成功を夢見ているクローデルにとって、師と仰ぎ愛するロダンは、自らのアイデアを奪い取る強奪者のようにも思われた。彼女を創作テーブルに引きずりあげ、凶暴なまでに作品を創り上げていくロダン。そして完成する『永遠の偶像』。



世間は、この作品をロダンの傑作として賞賛する。作品の源となったクローデルの存在は幻想と化し、誰もクローデルには見向きもしない。クローデルは絶望する。

創造主として葛藤を続ける芸術家ロダンと
孤独なクローデルの運命との闘いは2幕へと続きます…。

もっと詳しい作品の
あらすじは、
ホームページで!

©Yulia Kudryashova

ソリストたちが語るエイフマンの魅力

バレエ団の“顔”
オレグ・ガブシエフ
Oleg Gabyshev



【作品に満ちる感情】

〈ロダン〉は、湧き水のように噴き出す感情に溢れた作品です。私たちの技術は感情を表現するための手段でしかありません。だからこそ、毎回の公演で新しい印象を与えるのです。

【追求し続ける表現の深み】

〈ロダン〉はすごく長い時間をかけてエイフマンさんと作り上げました。でも彫刻制作の舞踊表現は、まだ理想には達していません。いまでも修正を重ねています。この演目では歩き方や腕のラインなど、独特な動きのニュアンスが大事です。このロダンの腕は、粘土だけではなく愛までも思い通りにする魔法の手を持つ腕でなければならないのです。

【群舞の存在感】

私は、エイフマン作品における群舞は、普通のクラシック作品のソリスト役よりも面白いと思います。彼らも主要な登場人物であり、〈アンナ・カレーニナ〉では、彼らこそがアンナを轢き殺す汽車に変貌します。アンナを殺す社会を象徴する存在となるのです。

バレエ団を代表する“魂のダンサー”
リュボーフィ・アンドレーエワ
Lyubov Andreyeva



【舞台上で“生きる”】

エイフマン作品には、いつも舞台の上に“人生”があります。感情を表現しきると、終演後は心の内側がすっかり空っぽです。肉体的な疲労は当たり前ですが、特に〈ロダン〉ではいつもそう感じます。私は、踊っているのではなく、2時間で物語を生きています。〈アンナ・カレーニナ〉についても、アンナという役を生きることができて私は幸せです。

【作品創造の場に立ち会う】

エイフマンさんは私たちダンサーの踊りや内面の状態からアイデアを吸収します。時には、決められたことが全部完全に変わってしまうこともあります。創造の過程に参加しているという感覚は、とても面白いことです。

【振付を超えた表現】

エイフマンさんは、毎回のリハーサルから感情を込めて踊るよう要求します。振付の動きだけでは、彼は満足しないのです。特にいつも「目!」とおっしゃいます。

両演目で
主演予定!
2人のインタビューは
ホームページでも
ご紹介しています。